

2017年3月19日(日)朝10:10～  
3月第3共同主日礼拝式説教

主の復活前第5、召天者記念礼拝等  
日本アライアンス庄原基督教会

## 説教題：信仰者の光栄と希望

聖書：I ペテロ 1章3～12節

＜口語訳＞

新約聖書366頁

I ペテロ 1章3～12節

＜新共同訳＞

新約聖書428頁

I ペテロ 1章3～12節

＜新改訳第3版＞

新約聖書452～453頁

I ペテロ 1章3～12節＜塚本訳＞

新約聖書736～737頁

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による  
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、  
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇ **I ペテロ書**は、**迫害**などが原因で**散らされ**、**流浪の人々**となった**ユダヤ人キリスト者**への**書簡**と理解され、その**離散生活**を**神の聖潔**に与った者として、**派遣された旅人**として、**神なき人々**に**神信仰の柔順**を示すことを求めています。
  - ◇ **I ペテロ書1章1～2節**は、**挨拶**、基本使信は、「**神の選び**」と「**神の派遣**」で、**3～5節**は、「**クリスチャンの光栄と希望**」(塚本訳)、「**生き生きとした希望**」(新共同訳)との表題がつくほど、「**神讚美**」に生きられる**キリスト者の特権**が扱われ、**6～12節**は、「**クリスチャンの光栄と希望**」(塚本訳)、「**生き生きとした希望**」(新共同訳)との表題の枠内で、『**ディアスポラ** **離散民**』の試練の中でも、「**神讚美**」に生き、**究極の救いのキリスト者の特権**に与っていることを**喜ぶ**よう求めます。
- ⇒地上では、どこの国家に属しているかが大事ですが、**神の御国**に属する場合でも、付与された**神からの身分保証**は大事なのです。  
⇔ある意味で、**私たちは、2重国籍の者**です。

本論；

◇本日、I ペテロ書1章3～12節から主の使信に思い・心をとめます。

◆ I ペテロ1章3～5節；ペテロは、神讚美できる人は、神信仰に生きる望みを与えられたと確信する者であると語っています。

◇3～12節；塚本訳 ◆クリスチャンの光栄と希望(引用聖句は、口語訳)

「3 ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、

4 あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである。

5 あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、信仰により神の御力に守られているのである。」と、ペテロは、語ります。

◇3節；「ほむべきかな」と、ペテロは讚美を  
ディアスポラ  
『離散民』の同胞に呼びかけています。

◇3節；「わたしたちの主イエス・キリストの父なる神」と神讚美することを、ペテロは求めます。  
⇒神讚美できるのは、「主イエス・キリスト様」の神信仰の『恵み』に与るほかないのです。

◇3節；「神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ」と、神讚美の根拠を、ペテロは明示します。

⇒KK師は、「生ける望に新生せしめられた事」が、神讚美できる理由だと仰せです。

⇔また、KK師は、神讚美できないのは、「望なき死の状態」にあるからで、我らの主イエス・キリスト様は、「望なき死の状態」にとどまらず、「死人の中から復活し給うた」ことで、「生ける望」を与えることがおできになることを示しておられます。

⇒神信仰に生きるために、神讚美が不可欠なのです。

⇒「わたしたちの主イエス・キリスト」にあつては、  
キリスト者は、「望なき死の状態」に主が  
とどまっておられないように、そこにとどまる者  
ではないからです。

⇒キリスト者は、「わたしたちの主イエス・キリスト  
の復活」に与ることで、「神の復活のいのち」、  
すなわち、「永遠のいのち」＝神との永遠の  
交わりに与っているのです。

◇4節；「天にたくわえてある、・・しぼむことの  
ない資産」が、地上の目に見える「相続財産」  
と違って、「朽ちず汚れず、しぼむことのない」  
相続財産であると、「生ける望」を「永遠の  
いのち」の相続財産という側面から、ペテロは、  
提示しています。

⇒「地上の資産」に心が縛られることが現実で、  
だれも、地上生活をする限りでは、逃れること  
ができない事実です。

⇒ペテロが問うていますのは、神讚美の心を  
働かせることによって、「人間礼讚」の「望なき  
死の状態」が当たり前の神なき社会の中でも、  
神中心の「朽ちず汚れず、しぼむことのない」  
「生ける望」に生き抜けると語っているのです。

◇5節；「**終りの時に啓示さるべき 救にあずかるために**」と、我らの主イエス・キリストの再臨の時、「**永遠のいのちの相続財産**」に与る「**神信仰**」を護る神の力を、ペテロは提示しているのです。

⇒**KK師**は、5節の「**救い**」を罪からの救い、神の義に与ることと理解せず、「**天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産**」、すなわち、「**永遠のいのち**」に与ることだと理解しておられます。

⇒**ペテロの神信仰**は、**ペテロの神信仰の才覚**からではなく、**神の力の中に生きる神信仰の告白**なのです。

⇒**天の神のもと**にある方々を記念する召天者記念礼拝式は、「**天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産**」、「**永遠のいのち**」を共有していることで結びついているのです。

⇒目には見えませんが、「**同じ天の神様**」に向かって礼拝をささげているのです。

⇒**神讚美**を共有することが、「**永遠のいのち**」の共有そのものなのです。

◆ I ペテロ1章6～12節 ; ペテロは、人間中心の中での試練は、神信仰に生きる望みを与えられたと確信する者には必然であると語っています。

◇ 3～12節 ; 塚本訳 ◆ クリスチャンの光栄と希望(引用聖句は、口語訳)

「6 そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。

7 こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変わるであろう。

8 あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいけなけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。

9 それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである。

10 この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。

11 彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。

12 そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。」と、ペテロは、語っています。

◇6節；「今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる」と、ペテロは試練を『ディアスポラ離散民』の同胞に認めるよう呼びかけています。



⇒決してこれは、消極的な発信ではなく、「**試練**」を**7節**にある**火**による「**精錬**」と連携させ、「(御意により)」と塚本訳が補充する通り、前向きに受けとめることを、**ペテロ**は求めています。

⇒**6節**の「**試練**」は、暴行や虐待からのことば、基本的に、**肉慾の誘惑**から来るもので、「**悩まなければ**」も、「**心痛めなければ**」との意味から来ているのです。

⇒『**離散民**』<sup>ディアスポラ</sup>の人々の「**試練**」が自分の**罪の支払いの報酬**であったとしても、心の苦痛や悔いの思いを先ず承認することから**神**の「**精錬**」と前向きに受けとめる**神信仰**が働く余地を私たちも持てるのです。

⇒人間が意図的に与える「**試練**」は、飽くことなく繰り返して押し寄せ、押し付けて来ますが、**神**が与える「**精錬**」は、金の「**精錬**」に不可欠な作業であるように、**神信仰**にも、**神への徹底服従**に至るには、「**試練**」も必要なのです。

◇**6節**；「**あなたがたは大いに喜んでいる**」

⇒「**喜んでいる**」は、現在形でも、命令形でも、どちらでも訳すことができる時制になっていて、永井訳など多くが、現在形で翻訳しています。

⇒どちらにしても、「**試練**」や「**精錬**」を乗り越えた**神信仰**がもたらす**金**にも勝る「**火によって本物であると証明された尊い本物**」、「**(君達の) 面目また光栄また栄誉**」を「**喜ぶ**」ことを、ペテロは求めます。

⇒**KK師**は、文語訳の「**信仰の<sup>ためし</sup>験<sup>つく</sup>⇔壊る金**⇒**貴くし、<sup>ほまれ</sup>譽と<sup>たふとき</sup>光栄と尊貴を得る**」と解説、**神信仰の<sup>み</sup>果実**を「**喜ぶ**」ことが求められていることをご指摘です。

⇒**金**の「**精錬**」は、**純金**を得るため欠かせないことなのですが、**金**が**人間の慾望**からの「**誘惑**」に用いられ、**魂**の滅びを招くことと比較して、**神信仰の<sup>み</sup>果実**を「**言語に絶する<sup>よろこび</sup>喜悦を喜ぶ**」ことが求めています。

⇒**神信仰**の「**精錬**」は、喜びです。

◇10節;「**この<sup>せんさく</sup>救いを穿鑿し**」と塚本虎二師は翻訳されましたが、「**この救い**」、「**天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産**」こそ、**神信仰の究極の目的**であり、ペテロが**喜び・讚美**することを求める根拠なのです。

◇11～12節；ペテロは、旧約時代の預言者たち、天使たちも、「彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである」とも、「そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である」とも表現し、「神の御子イエス・キリスト様」が与えて下さる「生ける望・永遠のいのち」こそ、「天からつかわされた聖霊にディアスポラ感じた福音」であると、ペテロは『**離散民**』に希望を語っているのです。

⇒召天者の方々は、地上では、『ディアスポラ離散民』であったことを実感しつつ、「生ける望・永遠のいのち」を喜ぶことの**光栄、希望、喜び**をも、味わっておられるのです。

## 結論；

- ◇ **神**は、昔も今も、変わらず愛の神、思いやりの神です。
- ◇ **I ペテロ書1章1～2節**は、挨拶、基本使信は、「**神の選び**」と「**神の派遣**」で、**3～5節**は、「**神讚美**」に生きられる**キリスト者の特権**が扱われ、**6～12節**は、「**クリスチャンの光栄と希望**」(塚本訳)、「**生き生きとした希望**」(新共同訳)との表題の枠内で、『**離散民**』<sup>ディアスポラ</sup>の試練の中でも、「**神讚美**」に生き、**究極の救いのキリスト者の特権**に与っていることを**喜ぶ**よう求めます。
- ⇒「**試練**」に敗北し、「**望なき死の状態**」に陥った『**離散民**』<sup>ディアスポラ</sup>の**キリスト者**には、心痛める地上生活があったと思われます。
- ⇒ペテロは、彼らが**神信仰**によって獲得した「**天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産、永遠のいのち**」を「**生ける望**」として、「**言語に絶する喜<sup>よろこび</sup>悦を喜ぶ**」**希望の神信仰**に生き抜くことを期待しているのです。
- ⇒**神礼拝、神讚美**を大切にして**希望に生きたい**。